

会 議 録

会議の名称		令和5年度つくば市バースセンターに関する懇話会		
開催日時		令和5年11月14日（火） 18:30～20:30		
開催場所		つくば市役所 本庁舎2階 202会議室		
事務局（担当課）		健康増進課		
出席者	委員	黒田勇二（なないろレディースクリニック理事長） 前島正基（前島レディースクリニック院長） 浜中勝美（つくば市議会福祉保健委員会委員） 間野聡子（市民委員 NPO 法人ままとーん理事） 篠崎紗由美（市民委員 助産師）		
	事務局	木本課長、青木統括、飯野係長、久保田係長、三輪保健師、古田主任		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	1人
非公開の場合はその理由				
議題		報告 ①協定書・覚書について ②バースセンター再整備の進捗について ③バースセンターの利用状況について ④総合周産期医学寄附研究部門（寄附講座）について		
会議録署名人	—	確定年月日	令和	年 月 日
会議次第	—			

< 報告事項 >

様式第1号

青木統括保健師	<p>それでは皆様、本日はお忙しい中、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。本日の進行を務めさせていただきます健康増進課統括保健師の青木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。これからの進行につきましては、着座にて失礼いたします。本日の懇話会に当たりまして、ご報告いたします。本懇話会は、つくば市附属機関の会議、及び、懇談会等の公開に関する条例第3条に基づき、公開とさせていただいております。また、議事録を作成するために録音をいたしますので、あらかじめご了承くださいませようよろしくお願いいたします。それでは定刻となりましたので、ただいまから令和5年度つくば市バースセンターに関する懇話会を開会いたします。</p> <p>それではここで、委員の皆様をご紹介します。お名前をお呼びいたしますので、一言ごあいさつを頂戴したいと思います。</p>
委員	<p>～各委員自己紹介～</p>
青木統括保健師	<p>ありがとうございました。なお、茨城県つくば保健所所長、野田秀平様は所用により欠席となります。続きまして、本日出席しております職員の紹介をいたします。健康増進課課長の木本です。</p>
事務局職員	<p>～事務局職員紹介～</p>
青木統括保健師	<p>それではこれから議事に入りたいと思います。本日の座長ですが、つくば市バースセンターに関する懇話会開催要項第5条により、委員の互選により選出することとなっています。立候補される方はいらっしゃいますか。</p>
浜中委員	<p>事務局の一任でいいんじゃないでしょうか。</p>
青木統括保健師	<p>はい、ありがとうございます。事務局の一任ということをご</p>

様式第 1 号

師	<p>提案いただきましたので、こちらに一任をさせていただきます。</p> <p>はい。では座長の方を黒田委員にお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。</p>
黒田委員	<p>はい。</p>
青木統括保健師	<p>ありがとうございます。それでは、黒田委員よろしくお願いたします。</p>
黒田委員（座長）	<p>座長を仰せつかりました黒田でございます。皆様のご協力により円滑に会議を進めて参りたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。では議事の報告に移ります。1 から 4 までの報告を事務局からお願いいたします。</p>
木本課長	<p>はい。私の方からは、報告の方をさせていただきたいと思えます。まず初めに①協定書と覚書について、報告をさせていただきたいと思えます。</p> <p>昨年の懇話会で、ご意見を踏まえまして、寄附講座、バースセンターに関する協定及び覚書、こちらを継続してもいいんではないかというご意見がございました。それを踏まえまして令和 5 年の 3 月 31 日付けで、協定、覚書ともに再締結したというところでございます。</p> <p>資料の 1 - 1、1 - 2 をご覧いただけますでしょうか。協定書の内容になります。まず、寄附講座の設置に関する協定についてですが、内容の変更は特にございませぬ。名称はつくば市総合周産期医学寄附研究部門の設置に関する協定書に変更してございます。内容につきましては、つくば市の周産期医療の医療体制の充実向上、周産期医療を担う医師及び助産師の養成・確保を行い、将来にわたって市民の安全で、安心な出産の場を安定的に提供する目的としまして、年額 4,200 万円を寄附するものとなっております</p>

ます。また、バースセンターの適切な運営を図る旨の内容を含んでおります、つくば市バースセンターの運営に関する覚書、こちらとも併せて締結しております、こちらに関しましては、ともに令和 5 年の 4 月 1 日から令和 10 年の 3 月 31 日までの 5 年間の期間で締結しております。

続きまして資料 1 - 3 の方をご覧くださいませでしょうか。

こちらに関しましては、筑波大学附属病院、つくば市バースセンターの再整備に関する覚書になっておりまして、再整備が竣工した際に 3 億円を寄付する旨の内容を含んだものでございます。こちらが今回新たに結び直した形になりまして、つくば市バースセンターの再整備に関する協定書に変更してございます。締結期間につきましては、令和 5 年の 4 月 1 日から令和 6 年 3 月 31 日までの 1 年間です。こちらは再整備に関するものなので 1 年間という期間で締結をしております。

続きまして、②のバースセンター再整備の進捗状況について報告をさせていただきたいと思っております。まず、バースセンター設立の経緯につきまして説明をさせていただければと思っております。筑波大学と平成 25 年 4 月の 1 日から、平成 30 年 3 月 31 日までの期間で先ほど出た覚書の方を締結しております、つくば市のバースセンターを 12 床で整備することとなっております。しかしながら、病院の、病棟の再整備の方針が変わったこともありまして、平成 30 年 3 月 31 日までに病床の方が整備されなかったということがございまして、再度平成 30 年 4 月から令和 5 年 3 月 31 日までの期間で覚書を再締結したというような状況でございます。新たに今回結び直しをしたというような状況でございます。

続きまして工事の進捗状況についてですが、令和 5 年 9 月 8 日

に筑波大附属病院の方が来庁しまして、バースセンターの供用開始が、工事の設計変更及び、建設作業員のコロナ感染等の要因で竣工が令和 5 年 12 月予定だったのですが、こちらが遅れまして、令和 6 年 8 月に変更になるという旨の報告を受けております。令和 5 年 12 月から竣工する予定だったものが、来年の 8 月に変更となるものです。今年 4 月中旬にこの施工計画が筑波大学附属病院の方で変更になったということでしたが、筑波大学附属病院の方からはこの 9 月 8 日まで市への報告がなかったというような状況でございました。筑波大学附属病院にしまして、この供用開始が変更になった経緯と報告が遅れた経緯について、正式な文書で提出するように伝えてございます。9 月 8 日時点では、遅れますというような簡単な口頭での報告であったものですから正式な文書で求めているところでございます。また、この供用開始が令和 6 年度にずれ込むというところでございまして、先ほどちょっとお話をさせていただいた、つくば市バースセンターの施設再整備に関する協定書を 1 年間で結んでおりましたので、令和 6 年 3 月 31 日までで切れてしまいます。このため、来年度もしくは今年度に、再度締結して延長する必要性がございます。

続きまして③の、バースセンターの利用状況について報告をさせていただきたいと思っております。資料の 2、3 をご覧いただけますでしょうか。

まず、赤ちゃん訪問のアンケート調査の結果ですが、令和 4 年度の市内・県内の医療機関で出産した方のうち市内で予約が取れなかったと回答している方々の割合が 8.3% で、前の年よりも減少をしております。令和 2 年度につきましては、新型コロナウイルス

ルス感染症の影響で里帰り出産ができなかったことによって増加しておりますが、令和 3 年度には、黒田先生の「なないろもあバースクリニック」が開院していただきましたので、改善傾向に向かっております。また、ほかの状況でございますが、市内ではございませんが、令和 5 年 2 月に常総市に寺田医院が開院、12 月（来月）には、つくばみらい市に遠藤レディースクリニックが開院予定ということでございまして近隣市町村の出産環境が整いつつありますので、さらにこのアンケート結果は改善していくのではないかなと思っております。バースセンターの利用状況につきましては、令和 4 年 1 月から 12 月の分娩数、こちらが 103 件でございます。そのうち、つくば市民が 95 人という状況でございます。令和 3 年につきましては 88 件で、市民が 76 人でありましたので、利用者は増加をしております。令和 3 年に比べると増加をしているというところでございますが、令和 2 年度の利用者数までは届いていないという状況でございます。

続きまして④、周産期医学寄附研究部門（寄附講座）の状況報告をさせていただきます。地域の周産期医療体制の充実向上、周産期医療を担う医師や助産師の養成確保によって、安全で安心な出産の場を安定的に提供することを目的としまして、筑波大学に総合周産期医学寄附研究部門、寄附講座の方を設置いたしまして、毎年、市から筑波大学に対して、4,200 万円の寄附をしているというような状況です。

これまでの 10 年間の協定で（協定を結び始めてから 10 年になるのですが）4 億 250 万円、こちらの方を寄附しております。初年度に関しましては月数が丸々 1 年間ではなかったもので、4,200 万から月割りで減額した関係がございまして、4 億 250 万円と

いうふうな形で寄附をしてございます。新たに、令和5年度から5年間、再度協定の方を交わしておりますので、5年間延長させていただいたというところでございます。令和4年度の実績になりますが、医師が66名誕生しております。助産師が35名育成をされているというような状況でございます。また、総合周産期医学寄附研究部門ですが、こちらにつきましては、教授、准教授、講師、事務員の体制で運営をすることになっております。しかしながら、これも先ほどの再整備と同じ9月8日に筑波大学附属病院から報告がございまして、教授が法令によって連続任用期間10年の期間が満了となる8月末（これは特に法令によって10年以上雇用ができないと決められているようでその関係で）今年の8月末で退職をしまして、9月から不在になること、また、准教授につきましても、こちらは昨年8月末にすでに退職をしております後任が確保できないこと、今年度は、講師3人体制にして継続をしているという以上3点の報告の方を受けております。市としましては、令和5年度からこの寄附研究部門の設置に関する協定を作成している段階で、今年度の4月の段階で教授、准教授、講師の3人体制で実施できると認識をしておりましたし、筑波大学附属病院からも准教授が確保できていないという旨の報告もありませんでした。これは協定を3月末に結んだばかりですが、4月の段階で准教授が確保できていなかったという状況でございます。この件に関しましても、やはり市としては問題だと思っております。筑波大学附属病院に対しまして准教授、講師の3人体制が取れなくなった経緯、これなぜ取れなくなったのかというところの経緯と9月8日まで報告が遅れた経緯について、ベースセンターの再整備の検討とともに、正式な文章で提出するよ

様式第1号

	<p>うに伝えてございます。現段階でまだ筑波大の方から正式な文書での回答は得ていないという状況でございまして、連絡したところ、今週中ぐらいには送るというようなところでございます。以上で簡単ではございますが、報告とさせていただきたいと思いません。</p>
黒田委員（座長）	<p>はい。事務局からの報告を踏まえ、何かご意見がありますか。前島先生何かありますか。</p>
前島委員	<p>私初めてなので、バースセンターのその設立目的から伺いたいなという思いがありまして、そっちの話でいいですか。イメージしていたそのバースセンターというのは今の現在のニーズを考えると、例えば助産師が主体となるような分娩を希望する人たちが集まったりするのかなという思いがありまして、或いは、いざという時には大学病院があるので、緊急時には医者が来るけども、今流行のその助産師が主体になってやっていくための分娩、それがバースセンターなのかなというふうに理解したのですが、そうではなくて、違う形での分娩施設というふうに理解したほうがいいでしょうか。これがちょっとよくわからなかったものですから教えていただけるとありがたいのですが。</p>
木本課長	<p>まず、こちらのバースセンターを設立した経緯ですが、つくば市立病院が廃院になるというところからスタートしておりまして、その時の妊婦の方々にアンケートをさせていただいていたところ、つくば市には産む場所が少ないということでございます。先ほどのアンケート結果の中で、つくば市で産みたかったけれども、予約等が取れなくて、産めなかったという状況がございましたので、つくば市でその助産の場所を確保してその割合を減らしていこうというようなところでございます。病院ではなく助産施</p>

様式第 1 号

	<p>設というところになった経緯は、やはり筑波大学に病院としての機能があったので、バースセンターは助産師型にして産む場所の確保をしたというところが経緯でございます。</p>
前島委員	<p>ありがとうございます。やはりその助産師主体の分娩施設であるという理解でよろしいですか。</p>
木本課長	<p>はい、前島委員のおっしゃる通りでございます。</p>
前島委員	<p>そうしますと分娩数的には 103 名、令和 4 年度で 103 件というところは数字的には理解できるかなというところで、あとちょっと統計のことにつくば市全体の分娩数としては、この出産した市内の医療機関というところが、この表は全部の分娩数なのでしょうか。この表の見方がわからなくてすいません。全体のつくば市の出産数はどこを見たらよろしいでしょうか。</p>
黒田委員（座長）	<p>出生数でいうとつくば市は毎年、この 3 年ぐらいは 2,000 人を切るか 2,000 人位。つくば市内の出生数はそれぐらいたと思います。当院でもこのうち 1,200 人か 1,300 人位出生します。これは多分アンケートに答えた人の人数を足しているだけで、そうすると実際の分娩数はこの表には乗っかってきてないという理解ですが、つくば市内で 2,000 人はあると思います。また、筑波大学もバースセンターもうちも含めてですけど、近隣のもう 40 キロ圏内くらいの診療件数持っています。そうするとつくば市でやっているわけで、そうするとつくば市の全体の分娩数の中にそれぞれいろいろ医療機関が占める分娩数の割合の表というのはここに特に乗らないことになります。</p>
木本課長	<p>はい。今回資料の方にはつけておりませんが、つくば市全体ですと 2,372 人です。これは赤ちゃん訪問の対象者でございます。出生数に関しましては、黒田座長がお話いただいた 2,000 人ちょ</p>

様式第 1 号

前島委員	<p>っとくらい。令和 3 年ですと、2,167 人というような数字になります。</p> <p>ありがとうございます。まだちょっと理解できてない部分があるいろあるなので、もうちょっとお話を伺いながらまたお尋ねしたいと思います。</p>
黒田委員（座長）	<p>付け足しで言うと、茨城県全体としては毎年出生数がすごく下がってきて少子化があるのですが、このつくば市・つくばみらい市・守谷市ぐらいは出生数が維持できている希有な街であることは間違いないし、あとつくばに近隣市町村から移住してきて、分娩数が維持できているっていうのも、よその医療機関ではもう少子化がもろ煽りを受けて分娩数の縮小っていうのが余儀なくされているというのがあるのですが、このつくば地区はウチも含めてですけど分娩数が維持できているっていう現状です。</p>
浜中委員	<p>浜中委員は何かご意見がありますか。</p> <p>私も今回初めて参加させていただいたのですが、審議会・議会の方でこのバースセンターの再整備と寄付金 3 億円、それから投資継続で、今後 5 年間も含めて今までも 4 億 250 万、これから毎年 4,200 万っていう寄附金を寄附講座という形で進めていくわけですけれども、それに対しての、質疑とかそういう部分については 3 月定例会の代表質問で、質疑がありました。内容としては「市内で産婦人科が少ないため困っています」「人口増によりますます需要が高まるのではないか」と。また、「この事業でそういうものが解決されるのか」との質問が出ました。市長の方では、このバースセンター、現在 6 床で稼動しており、先ほど、開始が少し遅れるということでしたが、3 月当時「今年 11 月頃には施設が再整備されて、病床数が 6 床増える」と、答弁をされておしま</p>

す。またこの再整備費用として3億円を寄附することに対して市民の利便性、また子育て対策につなげていくべきではないかと、そういう部分の質問もありました。そういう中では、今後のバスセンターについて分娩の実績や、利用者の意見、また近隣市町村を含めた分娩取り扱いの医療機関の設置状況とか、また、医師等の配置状況とかについてこの懇話会の中で、評価また協議を行っていく方向性で検討していると、市長の方からありましたけども、同僚議員の方からも、子育てに直結するような事業であれば設置再整備費用として3億円というのは納得できるのかなとのことでした。

また、つくば市民の方が結構利用されているってことで、つくば市在住の方が優先っていうような形ができるかどうかわかりませんが、そういう交渉も、お願いしたいということの要望もありました。それから、私ども福祉保健委員会の中では、この4,200万・3億円の予算に関して質疑は今回なかったのですが、昨年度この周知がまだ不徹底じゃないのかとか。

そういう部分については、また今後我々も議会の中でもいろいろ検討しながらいきたいと思っておりますので、概ね、議員、議会や、委員会の中では賛成じゃないかなと、そういうふうに思っております。また今後、多様な委員のご意見や立場の方がいらっしゃると思いますので、こういった限られた予算の中で寄附金も、いつまで継続していけばいいのかとか、また使い方とか、そういう部分も含めて、今後議論をしていただきながら、意見を聞きながら議会としてもとらえていければいいのかなと、そういうふうに思っております。

黒田委員（座

浜中委員、ありがとうございます。今後も議会の状況を報告し

長)

ていただきたいと思います。

間野委員、実際利用者の方の側としてどうですか、ずっとこの懇話会も何年か出ておられますけど。

間野委員

はい、そうですね。今回のお話を聞いていまして、ちょっと単純に思ったのが、大学の方が大分本当に遅れて遅れて遅れてっていう感じなんだなっていうのは伝わってきました。今までの経緯を伺っていてコロナが重なっちゃったりとか、いろいろタイミングも悪いところもあったのかなと、資材が高騰するとか人手もなかなか確保できなくてっていうお話も聞くので、なので、遅れてしまったりっていうのはもう、ある意味仕方ない部分なのかなと思いつつも、大分遅れているなっていうのが正直な印象なのと。あとはその報告がなくてっていうのがあったので、先生方忙しいのっていうので単純になんでそういう報告とかも遅れちゃったのかなとか。予想もしなかったことが何か起こっているのかなとか、何かちょっと心配をしてしまったという感想を持ちました。

あとはつくば市外の利用の方が結構いるという報告は、毎回聞いていたんですけども、市外っておっしゃっても里帰りでつくば市のご実家に戻ってきて産むっていう方も結構いらっしゃるんじゃないかなっていうのはちょっと思っていて。なので、そういうことはある意味市民ではないけどかつて市民みたいな方もいらっしゃるのかなと。なので、そういう方はつくば市に、そのときには住んでないとしても市民扱いというか、別にそれはいいのかなっていうのはちょっと思いました。バースセンターの利用者さんが分娩件数も増えているっていうことですけども、毎回出席させていただいて、私はバースセンターで産んだ人を聞いたことないと何回も(私の周りでは聞いたことなくっていうの

を)来るたびにお伝えしていたと思うのですが、今回初めて見つかりました。実は身近で3人ぐらい一気に実は産んだよって話を聞いたのですが、でもやはり狭き門というか、やはりいろんな条件がかなりこうでというのを言われて、そこに通ればというかそこに見合う・大丈夫だったら、そのままバースセンターでとなるのだけれども、最初はバースセンターで見ましようって言っていたのがちょっと検査で何か引っかかったとかそういうので病院にやっぱり移りましようかってなっちゃうとか。本当に最後までバースセンターで見えていただいて分娩まで至ったっていうのが結構奇跡と言え失礼かもしれないですけど。かなり狭き門だっていう話も一緒にちょっと聞こえてきたりして。ただそこで産んだ方については非常に快適だし、すごく手厚く助産師さんたちが本当にいろいろケアしてくれるし、女性同士だからとかいうのもあるのか、非常に行き届いていてとても快適に過ごせて、とてもよかったっていうお話は聞いていて、いいなって、すごくうらやましいなと思いました。ただ、知る機会が、今はホームページとかそういうところから見ている人とか、あと何かのきっかけでやっぱりご案内をいただくとか、そういうので知る機会は大分増えてきた、というお話も聞いてはいます。あとは、今お母さんたちはもうそれこそ若い人たちは全部スマホでぱっと情報検索をするので、それこそ「つくば市 出産」と検索すると多分引っかかってくるのかなと。逆にその紙ベースだったり、口コミだったりっていうのよりはもうそういうので調べてパッと見られた方が、実は引っかかる機会は、多いのかもしれないのと、このところきっと周知度も大分上がってきているのかなっていう印象は持ちました。以上です。

様式第1号

黒田委員（座
長）

ありがとうございます。実際、立ち上げまでやっていた篠崎委員のご意見もいただけますか。

篠崎委員

私、助産師というより市民の立場から2点お伺いしたいことがあります。今6床の病床数を12床に増床するという計画を前から提案して、今まだ叶っていないところだったんですけども、6床から12床に増やしたことで、今つくば市のバースセンターの分娩件数が年間大体100件前後ってところだと思いますが、それが、大体何件ぐらいに増加するという見込みで12床なのかなってというのがちょっと単純に知りたいなところなんです。あともう一つが、どうしてもバースセンターで分娩というところに目が行きがちになってしまうのですけれども、今お話してくださったように、バースセンターに最初いたけれども検査結果に引っかかって途中で、バースセンターで産めなくなってしまったという方はこの分娩件数に入っていないとは思いますが、おそらくバースセンターで産めなかったという方は筑波大学病院での出産をされてると思っていて、決して本来であれば違う病院に転院という形にはなるんですけれども、センターでは産めないけれどもそのまま筑波大学病院で継続してケアを受けられるというところで、その継続したケアが切れてしまったというよりは、その妊婦健診自体をバースセンターで妊婦さんが受けられたということは、市民にとって少し意義があるものではないのかなと感じましたがどうでしょうか。

木本課長

はい、ご質問ありがとうございます。まず第1点目の、6床から12床に増床することに関しまして、まず12床でスタートしたかったけれども、開設が間に合わないので、今の段階だと6床のままです。それが12床

になったらどれぐらいの分娩数が増えるのかというところですが、病床数が倍だから、単純に倍になるというところは考えておりません、やはり先ほど言ったちょっとリスクがあったら、バースセンターではなくて、大学の方の産科の方に移るという方が大多数のようなので、期待を込めて1.5倍くらいになればとは思っております。やはりただ少しでも増床によって産む方が増えればその出産環境の充実を図っていきけるのではないのかというところを感じているところでございます。

篠崎委員

はい。私としてはバースセンターを開設して運営するにあたって、必ずしもバースセンターで分娩をするっていうことが目的であってそれがすべてではないと考えています。妊娠中に、バースセンターで受診をしていたけれども途中で検査結果等もしくは何かで引っかかってしまい、バースセンターで出産できなくなってしまったっていう妊婦さんはおそらくこの分娩件数にはその数は上がってきていないのが現状です。バースセンターで健診を受けた方が、筑波大学等で最終的には分娩になっても、バースセンターで健診を受けられたことに意義があるのではないかなと私は感じました。市民の声としてはどうなのかなとちょっと思った次第です。また市としてはこのような現状をどのようにお考えなのかなっていうところを聞けたらと思います。

木本課長

はい、ありがとうございます。市民の声として、もちろんバースセンターで産もうと思ったんだけど、医師の診察もバースセンターの方でも最低でも2回あるということで、何らか異常の所見等があった場合には、バースセンターの方から、筑波大の産科の病棟の方に移られるっていう方はやっぱり一定数いらっしゃるのではないかなというふうに思います。周産期内の助産システ

ムなので、お産をするときには医師が立ち会うっていうことにはなっているようなのですが。バースセンターから産科に移行された方がどの程度いるのかとかそういうのはこちらとしても状況把握はできてはいません。おそらく医療機関の方に分娩の予約をされる時に、やはり筑波大のバースセンターの方で希望したいというふうに市民の皆様はそこで答えるそうなのですが、皆様がこのバースセンターってということがどういう助産システムなのかがわかっていて、私は助産師の主導でというか一緒に、お世話に臨みたいと思ってバースセンターを選ばれる方だと思うんですね。ただ、何らかの事情で産科の方に移られるっていうことについては、ある程度市民の方も何か異常があったらば、産科に移るっていうことも承知をされて、バースセンターを選択はしていると思いますので、実際に変わってどうだったかっていう声までは、具体的なものは我々にはちょっと届いてはいないですが。自分がこう望むお産がしたいということで、皆さんが主体的に望まれる、その選択肢の一つとしてバースセンターで出産を希望される方々が、一定数いるので、その意味では意味があることではないかなと思いますが、答えになっていますか。大丈夫でしょうか。

すいません、お答えいただいてありがとうございました。

篠崎委員
木本課長

補足ですが、資料3の2ページ目、こちらの方ちょっとご覧いただければと思います。こちらが筑波大学附属病院産科の分娩数の推移でございます、令和4年は、分娩数が932件というふうになってございます。

浜中委員

少し関連でお伺いしたいのですが、今出産の傾向というかそういう部分について質問ありましたけども、里帰りも含めてそういう部分でつくば市内での例えば、出産したいという希望者が結

構、増加傾向っていうかそういう部分があるのかどうかっていう部分と、もう 1 点このバースセンターで、2024 年度（来年）ですが、病院等の勤務医の働き方改革の部分が結構規制、残業規制とか、そういう部分が出てくると思います。お産に関しては本当に 24 時間 365 日、待ったなしですので、そういう部分では、産科のお医者さんの育成とか助産師さんが結構育成されているっていうことで心配はないかと思いますが、このバースセンターが 12 床という形で 6 床増床という形になるかと思うのですが、お医者さんも関わってくるでしょうし、そういう部分ではその体制というか助産師さんの体制とかそういう部分、つくば市というよりも筑波大学の問題になるのでしょうかその辺は大学と話し合いをされているのか、どういう話し合いみたいな形になっているのか、そういう部分について少し教えていただければと思います。

木本課長

医師の確保の部分に関しまして、筑波大の方から特にその中に賃金上昇になったり働き方改革でこちらに伴って足りないという話は特に聞いてございません。ただ私どもも直接聞いているわけではございませんので、今回の報告漏れの経緯とかもございませので、もしかしたら浜中委員の懸念されているところが若干あるのかなと思います。おそらくその辺は黒田座長の方が多分苦勞しているでしょうから、医師の確保については苦勞しているところかなと思っております。

出産の増加とかは特には聞いてはいないのですが、やはり一番は黒田委員のなないろレディースクリニックさんであったりなないろもあバースの方で産みたいよっていう方が多いようです。ただ先ほど報告をさせていただいた出産環境、近隣の出産環境で

こちらが今年度につくばみらい市に1ヶ所というところで、充実してきつつあるので、例えば、みどりのとか出産の人たちが多いんですが、そういう方々が市内ではなくて、お隣のつくばみらい市に流れるというところはちょっとあるのかなと思っております。以上でございます。

前島委員

確認させていただきたいのですが、基本的にはつくば市においてその分娩がうまくやってもらえない、不足している実態っていうのはどうなっているのかをちょっと知りたいのですが、私たちが現場でやっている、「なないろ」さんのところに関しては分娩制限しているので、紹介状を書く機会は少ないのですが、大学病院とか学園病院に紹介状書く時に断られた傾向はなくて、本当に不足しているのか実態がちょっと読めないで、今後検討する上で（最初の会議だったので私も実態知らないで）その実態をご報告いただけると。前に同様の話をやったのかもしれませんがその辺の実態のことをちょっと教えていただけますでしょうか。

木本課長

そこに関しましてはまず調査の方法ですけれども、赤ちゃん訪問等に行った時にアンケート調査の方をしているような状況です。先ほどちょっとお話をさせていただいた出産環境の部分に関しましては、市内で分娩したかったが予約も取れなかったという方のアンケート調査しか取っておりませんで（今資料2の3番目の表に書いていますが）627人いて52人のところなんです。状況的なところに関しましては、なないろレディースクリニックで予約が取れなかった方が大多数を占めているのかなというところがございます。ただアンケートの内容につきましては、いかにどの数字を下げていくかっていうところを、主眼の一つとしておりますのでこちらの結果、出産環境が充実していけばどんどん減って

黒田委員（座長）

いくのではないのかな、例えばその近隣市町村に流れれば、つくば市内の数がつくば市内で産みたかったのだけれども産めなかった方や母数が減るので少なくなってくるのかなと痛感しております。

現場の私から言うと、確か年間で2,300 くらいは分娩をやっていますが、つくば市民じゃなくても霞ヶ浦市民・土浦市民・守谷市民・つくばみらい市民、それぐらいから広域から来ますので、つくば市の方が何%か調べたことないですね。うちは早くから来た人から予約をとっているので、つくば市民にこだわったことはないですけど、なるべく近隣の方もとるようにしています。

今回、近隣につくばみらいに遠藤医院ができて、常総に寺田医院ができて、水海道とか遠方の方は寺田医院を促したり。つくばみらい市の方も今、大半結構来てる状況なので、その方たちが近隣のクリニックに行かれたならば、今断っていた数字も変わるでしょうし、当院でも断っていた方がいればそれだけのキャパシティを、今、人をそろえて一応やっていますので、このアンケート結果、もし当院が絡んでいるものであれば、多少なりとも総数が一緒ですので、つくば市民だから当院や筑波大学、学園病院もありますし、少なくとも、二つ近隣にできたっていうことはこの環境は大きく変わる可能性は十分あると私は思っています。

前島委員

単純に計算して、今「なないろ」さんが1,000 件ぐらいはやっている。筑波大も年間1,000 件やっていて合計で2,000 件、その他に学園病院がいて、分娩数が年間の分別が2,300 ぐらいだとすると、学園が300 ぐらいやっていて、分娩数としては満ち足りているんじゃないかなと直感的には思うのですが、今後、つくばみらい市とかできてくるってことを考えると、分娩に対する不足

をするという形は、回避できているのかなっていう気がしているのですが、その辺のちょっと実態がこの表でわからなかったものですから。その辺の多分分娩っていうのは統計を取っているので大学病院とか各施設でそういうデータがあるかなと思うのですが、そういうので見ると、どのぐらいの比率でそれぞれの病院が取っているかっていうとわかると。不足っていうことは意外とないのかもしれないなと思っているのですが、その辺はいかがでしょうか。

木本課長

今の段階ですと、若干不足しているのかなというところはちょっと感じておりまして、やはり市民の方からも、市内に分娩するところが少ないよっていうご意見は多少ちょうだいしているところでございます。ただ実際は、周りの近隣の施設が充実してくれば、当然先ほどちょっとお話したように回り流れてきますので、それが回避できるのかなというところでございますので、このつくば市でバースセンターを持っている意味や、いつまでもたせるのかというところも、今後の議論の対象になってくるのかなと思います。周りが充実してくれば当然そのわざわざつくば市の方でバースセンターを筑波大の中に置かなくても済むというようなこともございますので周りの環境であったり、出産数であったり、こちらの推移を踏まえつつ、今後このバースセンターのあり方、どうしていくのかっていうところを考えていく必要があるのかなと思っております。

前島委員

今、現場で僕が理解できないのは、大学病院の分娩制限は多分してないと思うんですね。学園病院も分娩制限をしているっていう話は聞いてないので、キャパシティはあるのではないかなと思っております。そうするとあとは産科のドクターの人数とかそう

いうのに関係するのかもしれませんが、実際自分が現場で働いていて、分娩制限をしているっていう総合病院で分娩制限をしたっていう経験がないので、個人病院はしょうがないと思うのですがそういう点で考えると、その受け入れ体制の問題で大学の先生たちがいらっしゃらないのでその詳細はわかりませんが、そんなに不足するというのはちょっと考えにくいのかなっていう気はしているんですけど。事実、実際にやられている先生たちがいらっしゃらないので、そこの評価は難しいとは思いますが。

それからちょっと話がずれて申し訳ないのですが、私が外来でやっていて、バースセンターに紹介して欲しいっていう患者さんが確かに何人か、たまにいらっしゃるんですね。それで僕が困惑するのはいきなりバースセンターに送るってことはしたことないのですが、私の理解としてはまず筑波大に送って筑波大から、異常なものがない方たちをバースセンターに送るという理解でよろしいのでしょうか。それは、いきなりバースセンターに紹介状書くっていうことは可能なのでしょうか。

木本課長

前島委員のおっしゃる通り、やはり筑波大の方で一度確認をしてからバースセンターにするのか、産科にするのかというような確認作業の方はしているようです。多分、バースセンターでいろいろな基準を設けていますので、そういう上で多分大学の先生が1回または何回かチェックを入れてっていう感じで、直接の紹介っていうのはないということです。

前島委員

一般の人たちはそういうふうに思っているみたいで、バースセンターに直接紹介してくれって言っていらっしゃるので、多分それはできないと思いますよって話で説明しているのですが、それでよろしいってことですよね。ありがとうございます。

間野委員

今のお話に関連してなんですけれども、つくばで初産婦で、やっぱり高齢の方とか、あとやっぱり不妊治療をされた方とか、ちょっとリスクが高い方については、やはりバースセンターで産むのはそもそもがもう最初から駄目というか、多分引っかかっちゃうのかなっていうのがあって。結構そういう方の高齢で出産される方は多い印象を持っています。そういった方だと、バースセンターでベッド数が増えたとしても、そういった方の対応は基本バースセンターではできないのかなっていうのは思っていて。リスクが高い方は基本大学病院、ただ、もう何人も産んでいて、次産むときはバースセンターで産みたいって言って、リスクが低くてちょっと年は上がっているけども経産婦さんだしっていうので、そういったところが受け入れられたり、あと逆にその自分で家で産みたいからっていうので、バースセンターではないのですけれども、助産師さんを出張で来てくれる人を探して、もちろんお医者さんとの連携はきちんとするんですけれども、自宅で出産しますっていう方も結構何人か聞いています。なので、ただ単に市内だし外だっていうのはもちろんあるかもなんですけど、その自分がやりたいお産、こう考えたいって考えているお母さんがとても増えているなっていう印象も持ちます。逆に、先ほどの治療だったりとか、高齢出産だったりってなった時に本当は自分が産むときはこうしたかったのにといい思いと、でももう駄目だねって歳のせいなのね、みたいな。帝王切開ですって言われた時に、何か帝王切開だと、何かいいお産じゃないというか、何かちょっとこう、ネガティブなイメージでとらえられちゃって、それがとてもショックでっていうお話も聞いたりとか。だから、本当にいろんなそのニーズというか、お母さんたちの思い描くお産っていうの

が、どこで、できるのかとか逆にその今の状況だとどれができてどれができないのかっていうそのあたりの情報が実は今後とても大事になってくるのかなというのはとても感じます。病院じゃないと対応できないこと、そのリスクが高い時にどういうことが起こるとか逆に、こういう方だったら助産師さんでも、その医療的なケアがなくても別に妊娠出産は病気ではないので、産めますよっていうところとか、何かリスクとそのどういうふうに対応していけばいいのかっていうところの情報とかも、実は結構大事なのかなと。そうなってきたときにそのバースセンターでどこまでのどういうお産が受けられるのかっていう情報、ただ単にそういうところがありますっていうだけではなくてバースセンターだと、どこと違うのかが知りたいと思います。逆に変な言い方かも知れませんがバースセンターで産めるっていうのはちょっと「ステータス」みたいな、「選ばれし者」ではないですけど、何かちょっとこう、レアケースでいい感じにとらえてしまい、逆にそこではじかれちゃった人はすごくネガティブに思っちゃうとかっていう何か弊害というか、そういうことも起こり得るなっていうのも思うので。ですから、その人に合った、その場所を選べるっていうところで、足りないというか、確かに件数的には充足しているのかもしれないですけども、やっぱり「なないろ」さんで産むっていうのはとても人気で本当に早くから予約が埋まっちゃうから。もう分かったと思ったらすぐ予約しないとみたいな話も聞いたことがありますし、でも、「もあバース」はまた違う形でバースセンターにちょっと似たような感じになるのかなっていうイメージを持っているんですけど。なんでその辺りの情報が本当に妊婦さんたちにちゃんと価値、知識、情報をきちんと伝えら

前島委員

れるような、情報が提供されるような機会があると、もうちょっと落ち着いてくるのかなってというのはとても思います。

例えば、バースセンターに行く人たちはバースプランっていうのを持ってみんな行かれていますものなんでしょうか。こういうお産をしたいっていうことを、計画して受診されている方が多いのか、それともただ何となくちょっとどういう理解で皆女性たちがそちらをきたがっているのかってというのはよくわからないんですが。

黒田委員（座長）

私もバースセンターの内容はわかりますけど、うちで言えば似たような感じで「もあバース」というのをなないろレディースでやらせてもらっています。「もあバース」の気持はやっぱりバースセンターと同じように、今開院 22 年ですけど、もあバースから生まれてくるような現状になりましたので、満足度もやっぱり高いみたいです。その満足度ってというのは、助産師さんがつきっきりで、家族とともにみたいな。ただこれはやっぱり当院でもそうですけどハイリスクの方が非常に、大学はさらに私よりハイリスクを送っていますので。つくば地区はこの出産年齢も見てもらうところ非常に高齢です。うちなんかもう体外受精の妊娠率が 2 割ぐらいを超えています。そういう方がもう着床をさせたらすぐに出産の申し込みに来ますので。ある程度の方は、私のところでも大半見えていますけど。そのさらなるハイリスクを大学でも見られている状況で、そういう方も最初バースセンターを希望されるってということで、だから患者さんの方の中でも認識をもっとやっぱり高齢出産であって 40 歳以上の方で結構子宮筋腫があっても普通にお産になるかなと思ったり高血圧になって糖尿になったりって方も非常に昔に比べて増えています。やっぱり、

昔に比べて難産も増えるしハイリスクの方も非常に増えているので、バースセンターでやるっていうのは、ある程度やっぱりその上のストレスリスクっていうのも多少あることはあります。私のところも運営していて、ある程度そこに医者が張り付き、いい状態で監視するっていう状況がある程度バースセンターと同じような運営だと思いますが、バースセンターがやってるように「もあバース」も同じようにやっていますが、私たちも夜間は、そういうリスクを負わないように、助産師からもちゃんとそういうヘルプはちゃんと出すようにしています。そうすると、結構なそういう方も、バースセンターを求めるように、そういうこだわりも皆さん強いんですけどやっぱりリスクっていうのをちゃんと患者さんにも教育することも我々の責務かなっていうのを、以前に比べてそれ何人も（移行する方が）出るのです。

ローリスクの方もいますが、昔に比べてハイリスクの方が非常に（どの先生も言っていますが）増えています。ですから、バースセンターでお産できる・産めるっていうのは、ある程度先ほど間野委員が言われたように選べるものではないですね。年々少なくなっているっていうか、むしろリスクを負わないようなお産を求められる時代です。これは、ある程度そのバースセンターがどうのというか、筑波大学全体がもう守っているのですが、その中でバースセンターで産みたいっていう方は必然的にその施設としては重要ではあるけど。つくば市でやっていますけど、筑波大もそうだけどうちもそうですけどこのつくばエリア広域でも来て、もう土浦も含め石岡も含め何かほとんど何もない、もうお産の施設がないので。私のところも含めて、つくば市だからやるとかつくば市民だから優先するというのは当然大学もな

	<p>くて、このエリア広域を全医療機関が見てるっていう状況ですよ ね。ですから、だから本当遠藤医院と寺田医院が開設されること によって、私のところのキャパシティも当然求めるものを似たよ うなものを作られているはずですから。私のところも、だからも っと、今までお断りしていた人ももっと受け入れられることだど 思うし大学もその分キャパが薄まって少し全体的に変わってく るのではないかと。また、少子化の波が来ていますから、幾らつ くばでも出生数はもう頭3年間ほぼ頭打ちです。いずれもう減少 に転ずる時が来ますし（人口増加地域ではあります）。出生数 は多分3年間私統計見えていますけど大体横ばいだと思いますの で。移住してきた方がお産するケースも非常に増えているので。 そのあたりを踏まえて、数は充足ってはいわないけど私のとこな んか私が倒れてしまったらどうなっていくのか不安があります し、大学であったりバースセンターがあると非常に私たちも安心 して運営できる立場ではあります。</p>
前島委員	<p>バースセンターは、たとえば、こういう適用の方は、バースセ ンターでは分娩できませんよ、というのはアナウンスしているの でしょうか。</p>
黒田委員（座 長）	<p>はい。うちでも助産師のガイドラインみたいのがあります。そ ういうのはバースセンターの方も周知されているのでしょうか。</p>
木本課長	<p>バースセンターについては特に大学（筑波大）の方でガイドラ イン等を設けてスクリーニングしているかと思いますが、その 基準はきちんとしたお示しの方はしてない状況かと思いますが。</p>
間野委員	<p>そういうところの知識や基準を周知させるっていうのは結構 大事でみんなお産を安易に考えていますので、何でもすごい形で 産みたいなという希望はとてわかるのですが、実際にお産はリ</p>

スクがあるということをちょっと認識してもらおう上でも、そういうことは周知したほうがいいのかなあという気はしています。今後そういうのをやっていただいた上で、それでどのくらいのニーズになっていくのかっていうところはちょっと知っていただきたいなというふうに思います。

あともう1点ちょっと追加ですが、これも聞いた話ですが、妊娠したかもとなると、最初からもうお産ができる病院にかかるわけじゃなくてクリニックとか他のところにかかったりするのですが、その時にその紹介をしてもらうにあたって、「どこがいいですか」ではないけど、自分で調べて見つけてきてねって紹介状書くからみたいな話になることが多いと思うのですが、そうなった時にその情報を、市内でお産ができる施設はここで、こういう人ならここがおすすめとか、そもそもが受け入れられる・受け入れられないとか、こういう場合はもう大学病院がもう多分第1優先かなとか、そういうのがある程度情報として病院でもいいんですけども、例えばその母子手帳をもらう時とかに何かそういった、何かご案内みたいものをもらえるととか、何かそういったものがあると妊婦さんとしてはちょっと安心かなと思います。情報を調べるときに、今は正式なホームページを調べるよりは口コミを結構調べる人も多いみたいで、そうすると、結構間違った情報が独り歩きしていたりとか、なんかすごくいいこととかすごく悪いことが取り沙汰されていたりとか、いろいろこう偏っちゃうのかなっていうのもすごく思うんですね。なので、自分で調べてねっていうのが前提ではあるとは思いますが、調べるというよりはその最終的な決断をするのはもちろん本人とか家族にしてもらうのがいいと思うのですが、そういった情報については、あまり

	<p>本当今情報過多なので、きちんとした情報をしっかり提供してもらえると、その妊婦さんたちもちょっと落ち着いて、自分の状況の把握だったりに努められたりするのかなと思います。お仕事しながらの方が今とても多いので、本当にお仕事の産休に入るまでの間にそういうものを全部っていうのは、かなり負担が大きいのかなっていう印象も持ちますので。なので、できるだけそういったそのお産に対してのある意味支援というか安全で安心して落ち着いてお産が迎えられるその先の子育てまで繋がるような、そういった情報提供をぜひ、行政でサービスとして提供してもらえたらとてもいいんじゃないかなっていうのは思います。</p>
木本課長	<p>はい、ありがとうございます。前島委員、間野委員のご意見を参考にさせていただきながら、今後周知の方をしていきたいなと思います。</p>
黒田委員（座長）	<p>大分議論は進みましたが、篠崎委員、何かありますか。</p>
篠崎委員	<p>先ほど間野委員がおっしゃっていたように、おそらくバースセンターでお産したいなって思ったときに、一番に調べるのがまずホームページで、そのあと口コミを見ます。私自身もそうなんですけれども、そうした時に、筑波大学病院のバースセンターの情報が多くは載っていない状況でして、お産した方の口コミも数件っていう形で、後は有料会員でしか見られないような状況で、あまりこうわからないっていうのがちょっと本音なところだったんですね。おそらく初産・経産婦は受け入れているのかとか、受け入れている年齢とか（35歳なのか37歳なのか）、そういう本当に年齢とか、もちろん不妊治療もそうなんですけれどもそういったところから自分がバースセンターっていう選択肢があるの</p>

木本課長	<p>かどうかって検討するところの情報が、もう少し正しい情報であつたらいいのかなと思っていました。</p>
木本課長	<p>ありがとうございます。やはり周知であつたりは、つくば市だけではなくて筑波大学附属病院の方でも必要ではないのかなと感じているところでございます。こちらに関しましても、筑波大の方と特に今回新たにバースセンターの方が再整備されますので、そのタイミングの際は大々的にその周知活動をしなごら、どいう方が受け入れられるのか等を踏まえた上で広報活動の方を大学とともにしていけたらなと思つております。</p>
前島委員	<p>最後に確認させていただきたいのですが、バースセンターでは、先ほど分娩出産だけではなくて産後ケアの方もやつていごらという理解でよろしいでしょうか。</p>
木本課長	<p>筑波大の方は産後ケアはやつておりません。</p>
前島委員	<p>バースセンターの方ではやつてないので、そうすると今後予算を取る上で、産後のケアもするのかなつてさつきちよつと話を聞いていて思いましたが、予定に入つてないつてことなんですよね。</p>
木本課長	<p>そうですね。現段階でちよつと再整備におけるその産後ケアをやるよるな施設を作るとかそういうことを考えていごらというわけではないです。主に出産がメインといごらことでございます。</p>
前島委員	<p>わかりました、ありがとうございます。</p>
黒田委員（座長）	<p>先ほどの事務局の報告をまとめると、筑波大学で今回竣工に大分お時間がかかつたつていごらことも、報告がなかつたつていごらところも、改めて筑波大学に対してきちんと対応していただくよるにお伝えいただければと思ひます。また、いごら再整備後のバースセンターの分娩数とか、近隣の産科の利用状況、出産数等も</p>

	<p>踏まえて、今後、まだどれもが、今まだ開かれてない状況で、ちょっと去年一昨年と現状大体一緒なので、今後のバースセンターをどう運営していくのかを検討していく必要はあります。ちょっと大学の方も拡充したり、近隣の周産期施設が3施設増えることで、分娩数の推移、この地域の状況を踏まえて、この懇話会で引き続きあり方について協議していければと思うのですが、事務局としてどうでしょうか。</p>
木本課長	<p>はい、ありがとうございます。ぜひ皆様のご意見の方を聞かせていただきながら今後のバースセンターのあり方や、どう運営していくのか、いつまで続けていけばいいのか、それとも違う形の支援の方法がいいのか、そういうものを踏まえつつ検討の方を市の方でもしていけたらなと思います。</p>
黒田委員（座長）	<p>浜中委員も（ご意見）大丈夫ですか？間野委員も大丈夫ですか？</p>
間野委員	<p>先ほど、寄附講座、医師数や助産師数の話が出ましたが、筑波大学だったり市内、県内で活躍されている方がとても多いなっていうのはとても嬉しいなっすごく思います。助産師さんもすごく多いなっすごく思っ、助産師さんの、要はそのケアがバースセンターとかもあバースさんもそうだと思います。やはり妊婦さんにすごく寄り添って、本当にその時の状況に応じた本当に適切というか、この妊婦さんがすごくやってほしいと思うケアをちゃんと提供してもらえているっていうのは、すごく聞くので。病院での出産だと、もちろん、やはり助産師さんいらっしやっそれなりにケアしてもらえますが、病院なので、みんな忙しそうだから声がかけにくいとか、患者さんの的な感じで、要は助産師さんだったり先生だったり、接するような。産後のお母さんのお話</p>

とかも聞くので（実際に経験していないのでよくは知らないですけど）。

でも、そういった病院よりは、やはり雰囲気もちよっと暖かい
というか、そういう意味で手厚いというか本当にこう見てもらっ
ているというか、そういう感じの話も聞きます。なので、それぞ
れのお産の場所で、先ほど発言した「選ばれし者」だけじゃなく
てやっぱりお産されたお母さんたちが頑張ったっていうか、労わ
ってもらえるっていうか、そういったのがどこでお産しても、何か
してもらえるっていうか、そういう気持ち・気分が味わえるとい
うか、そういうのになればそんなにその争奪戦っていうか、どこで産
みたいとかっていうのが、そんなに争奪戦にならないのかなって
いうのもちよっと思っていて。

今、それこそ本当にいろんなニーズがあって無痛分娩とかそう
いうのもすごく今聞くようになってきましたし、前はへえーって
思っていましたけど、すごく楽だよなんて話を聞いたりとか。本
当にお産に関してのニーズっていうのが、いろんな個々のニーズ
が出てきているのでそのニーズに答えるのもそうですがやっぱり
自分の状況に合わせたサインをきちんと選んで、無事にお産が
迎えられて安心してお産ができて、そのあと、おうちに帰ってか
らの育児に頑張れるっていうかスタートが切れるような、何かそう
いったつくば市での出産・子育ての応援ももうそこから始まるの
かなと思いますので、ぜひつくば市として、お母さんたちは妊婦
さんがお母さんになってそこから子育てをしていくっていうと
ころ、お母さんだけじゃなくて、パパやご家族もそうですけどぜ
ひそこを応援していただくっていうか、そういったところの産後ケ
アも今すごくやっぱりニーズがこちらも増えています。受けたいけ

ど受けられないっていう話とか今本当に、たくさん申し込みも来てしまってってお話も聞くので。そういったところをぜひ充実していただけると、何か子育てにまたお母さんたち前向きにスタートできるのかなと思うので、バースセンターもぜひ、産後ケアもしてもらえたらいいなというのはちょっと今妄想として思いました。

黒田委員（座長）

ありがとうございます。一つ意見ですけども、当院でも産後ケアをやっていて、市からの助成もいただいております。これは人件費が非常にかかる問題で、助産師が大学でどれぐらい輩出できるのかわからないですが、当院の「もあバース」に関して言えばもうオーバーワークになっています。「レディースクリニック」のほうがはるかにお産（の数）をやっていますが、助産師の働き方改革という観点と、どちらも1人のお産に関わりたいて助産師さんの宿命があるんですけど助産師の中の葛藤もあるんですよ。「もあバース」でも、その1人に頑張っけて付けられる人数というのが、予算数が少ないので、その人件費のこともありますけど。個人でやっていますとそういうジレンマがとてもありまして。大学はそれは見えないけど（人材育成も兼ねているので）。バースセンターですとその助産師の数だけ見ると大学病院だからいっぱいいるんじゃないかと思われるかもしれないけど、現場は皆さんのリクエストにこたえるべくやっても難しいところがあり、もあバースは人数をかなり限定させてもらっていますが、もうオーバーワークになりやすいのが現状で。「レディースクリニック」のほうで助産師が抱えておりますが、「レディースクリニック」のほうで助産師が抱えておりますが、「レディースクリニック」のほうで助産師が抱えておりますが、「レディースクリニック」のほうで助産師が抱えておりますが、「レディースクリニック」のほうで助産師が抱えておりますが、

と当院のスタッフからお叱りをいただくんですね（みんな頑張っていますけど）。そういうふうに患者さんが感じられてしまうっていうのはちょっと現場としての意見は、助産師のジレンマがあります。難しいですが現場の意見としてです（余談ですが）。

バースセンターもあるし「もあバース」もあるし、つくばはいいところだなと思っています、他市は病院しかないですから。そういうのも含めて贅沢な意見だとは思いますが、つくば市がこうやって、バースセンターを増床しているっていうのは。いろんな予算のこともあると思います、人件費的なこともあるんですけど。幸い、つくば市にお子さんが集まるとか、人口が集まるっていうのはそういう環境もマイナスじゃなくてプラスのイメージで、そういった環境も、また産みたくなったという思いで当院の近隣に来てくれた方もいるし、都会から引っ越してきた人もいます。そういう方もいるしそういう環境があるから、つくば市が選ばれて人口が増えている可能性もあります。

今後のバースセンター、今後、今いろいろな意見があると思いますが、協議を重ねて、また局面変わってくるかもしれませんが、ぜひひとつよろしく願いいたします。

青木統括保健
師

はい、ありがとうございます。座長どうもありがとうございます。本日本当にありがとうございます。時間も長時間にわたって、貴重なご意見を賜りました。ありがとうございます。今後とも皆様からのご意見等いただきながら進めて参りたいと思いますので、ご協力くださいますよう、どうぞよろしく願いいたします。それではこれもちまして、つくば市バースセンターに関する懇話会を閉会といたします。重ねて申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

様式第 1 号

令和5年度つくば市バースセンターに関する懇話会次第

日 時：令和5年11月14日（火）

午後6時30分から

場 所：つくば市役所2階 202会議室

1 開 会

2 挨拶

3 委員紹介

4 事務局紹介

5 議事


（1）報告

- ① 協定書・覚書について
- ② バースセンター再整備の進捗について
- ③ バースセンターの利用状況について
- ④ 総合周産期医学寄附研究部門（寄附講座）について

（2）意見交換

6 閉会

つくば市総合周産期医学寄附研究部門の設置に関する協定書



国立大学法人筑波大学（以下「甲」という。）とつくば市（以下「乙」という。）は、乙の寄附により甲に設置するつくば市総合周産期医学寄附研究部門（以下「寄附研究部門」という。）に関し、以下のとおり協定を締結する。

（目的）

第1条 この寄附研究部門は、乙の要請に基づき、甲において、つくば市地域周産期医療体制の充実・向上、周産期医療を担う医師及び助産師の養成・確保を行い、将来にわたって市民の安全で安心な出産の場を安定的に提供することを目的とする。

（教育及び研究）

第2条 前条の目的を達成するため、甲は寄附研究部門において、次に掲げる教育及び研究に取り組むこととする。

- (1) 地域周産期医療を担う新たな人材育成プログラムの開発と運用に関すること。
- (2) 地域周産期医療体制の整備、卒前・卒後の一貫した総合周産期医学教育・研修の環境づくりに関すること。
- (3) 地域周産期医療提供体制の在り方に関すること。

2 甲は寄附研究部門に教員を置き、乙と協議の上、前項に規定する教育及び研究を行うものとする。

（実施場所）

第3条 前条の教育及び研究は、乙の要請に基づき、甲が設置する筑波大学附属病院の組織として設置するつくば市バースセンターにおいて行うものとする。

（設置期間）

第4条 寄附研究部門の設置期間は、令和5年4月1日から令和10年3月31日までとする。


2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない事情が生じた場合は甲と乙が協議し、当該期間を変更することができるものとする。

（寄附金の額）

第5条 寄附研究部門の設置に係る乙の寄附金の額は、各年度4,200万円とする。

2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない事情が生じた場合は甲と乙が協議し、各年度の寄附金の額を変更することができるものとする。

（寄附金の使途）



第6条 前条の寄附金は、第2条の教育及び研究を実施するために必要な経費に充てることとする。

(支払いの方法)

第7条 乙は、甲と協議し、時期を定め、年度ごとに大学に寄附金を支払うものとする。

(報告)

第8条 甲は、毎年度、当該年度の実績、教育及び研究の成果を翌年度5月末までに、乙に報告するものとする。

(内容の変更)

第9条 甲は、寄附研究部門の内容に重要な変更を加えようとする場合は、あらかじめ乙と協議するものとする。

(効力)

第10条 本協定は、令和5年4月1日から効力を生じる。

(その他)

第11条 本協定に関して疑義が生じた場合は、甲と乙はその都度、誠意をもって協議の上、決定するものとする。

この協定の締結を証するため、本協定書2通を作成し、甲乙記名捺印の上、それぞれ1通を保有する。

令和5年(2023年)3月31日


甲 茨城県つくば市天王台一丁目1番地1
国立大学法人筑波大学
学長 永田 恭介



乙 茨城県つくば市研究学園一丁目1番地1
つくば市
つくば市長 五十嵐 立青



つくば市バースセンターの運営に関する覚書



国立大学法人筑波大学附属病院（以下「甲」という。）とつくば市（以下「乙」という。）は、令和5年3月31日付で締結したつくば市総合周産期医学寄附研究部門の設置に関する協定書に基づき甲の組織として設置するつくば市バースセンター（以下「バースセンター」という。）について、その適切な運営を図るため以下のとおり覚書を締結する。

（バースセンターの設置目的）

第1条 バースセンターは、次に掲げる事項を目的として設置するものとする。

- (1) 助産師が妊娠期から産褥期に継続的に関わることで、妊産婦が主体的に妊娠・出産・育児に臨めるよう、妊娠・出産に対する危険性が低い妊産婦を対象に、助産師が中心となって妊娠・出産・育児をサポートし、医師立ち会いの下で出産できる環境を提供すること。
- (2) 周産期医療を担う医師及び助産師の養成・確保のため、寄附研究部門にて取り組む教育及び研究を行う場としての役割を果たすこと。

（バースセンターの管理運営）

第2条 バースセンターの管理運営は、甲と乙が必要な都度、協議を行い、それに基づき、甲が自己の責任と負担で行う。

（バースセンターの業務）

第3条 バースセンターは、寄附研究部門で取り組む教育及び研究組織として、次の業務を行う。

- (1) 地域周産期医療に係る臨床教育・研修に関すること。
- (2) 地域周産期医療提供体制の整備及び在り方に関すること。
- (3) その他寄附研究部門の目的を達成するため必要な業務

（バースセンターの管理運営等に要する経費負担）

第4条 バースセンターの管理運営等に要する経費は、甲の負担とする。

（バースセンターの運営により生じた収益の帰属）

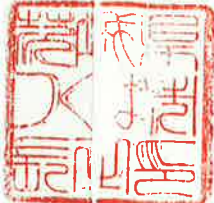
第5条 バースセンターの運営により生じた収益は、全て甲に帰属する。

（バースセンターの周知）

第6条 甲は、来院したつくば市民が確認しやすい場所に、バースセンターの名称を表示するものとする。

2 甲、乙ともにバースセンターの周知に努めるものとする。

（有効期間）



第7条 この覚書の有効期間は、令和5年4月1日から令和10年3月31日までとする。

(その他)

第8条 この覚書に定める事項について疑義が生じたとき又はこの覚書に定めのない事項について定める必要が生じたときは、その都度、甲、乙が協議の上、決定するものとする。

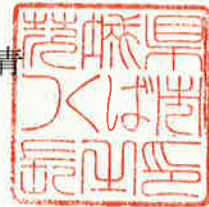
この覚書の締結を証するため、覚書2通を作成し、甲、乙が記名捺印の上、それぞれ1通を保有する。

令和5年(2023年)3月31日


甲 茨城県つくば市天久保二丁目1番1
国立大学法人筑波大学
附属病院長 原 晃



乙 茨城県つくば市研究学園一丁目1番地1
つくば市
つくば市長 五十嵐立青



つくば市バースセンターの施設再整備に関する協定書



国立大学法人筑波大学（以下「甲」という。）とつくば市（以下「乙」という。）は、つくば市バースセンター（以下「バースセンター」という。）の施設再整備（以下「施設再整備」という。）に関し、以下のとおり協定を締結する。

（目的）

第1条 助産師が妊娠期から産褥期に継続的に関わることで、妊産婦が主体的に妊娠・出産・育児に臨めるよう、妊娠・出産に対する危険性が低い妊産婦を対象に、助産師が中心となって妊娠・出産・育児をサポートし、医師立ち会いの下で出産できる環境を拡充して提供することを目的とする。

（施設再整備の規模）

第2条 甲は、実施している病棟Bの全面改修に際して、当該建物内に12床に増床した専用病棟としてバースセンターを移転し、再整備するものとする。

（施設再整備に要する経費負担）

第3条 施設再整備が竣工した際は、乙は、甲に施設再整備に要した費用の一部として3億円を一括して寄附するものとする。

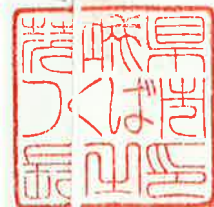
2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない事情が生じた場合は甲と乙が協議し、寄附金の額を変更することができるものとする。

（有効期間）

第4条 本協定の有効期間は、令和5年4月1日から令和6年3月31日までとする。

（その他）

第5条 本協定に定める事項について疑義が生じたとき又は本協定に定めのない事項について定める必要が生じたときは、その都度、甲、乙が協議の上、決定する。



この協定の締結を証するため、本協定書2通を作成し、甲乙記名捺印の上、それぞれ1通を保有する。

令和5年(2023年)3月31日

甲 茨城県つくば市天久保一丁目1番地
国立大学法人筑波大学
学長 永田 恭介



乙 茨城県つくば市研究学園一丁目1番地1
つくば市
つくば市長 五十嵐 立青



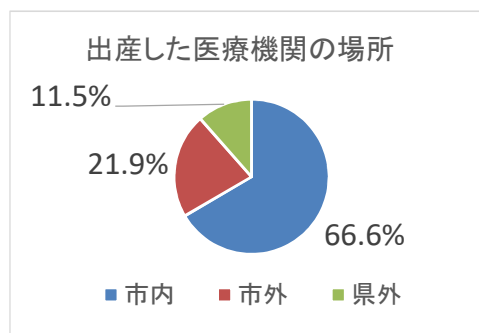
資料2

(令和4年度)あかちゃん訪問調査時における市民の出産場所等に関するアンケート調査

- | | |
|---------|---|
| 1 調査の目的 | 本調査は、市民の出産場所に関する状況把握のため実施 |
| 2 調査期間 | 令和4年(2022年)4月1日～令和5年(2023年)3月30日(12ヶ月分) |
| 3 調査対象 | 市内に住所を有する、概ね生後4ヶ月未満の赤ちゃんを持つ母親 |
| 4 回収件数 | 1,876件 |
| 5 調査方法 | いばらき電子申請による電子申請アンケート |

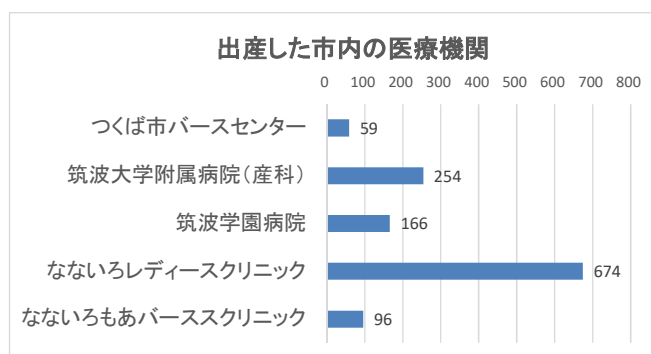
■ 出産した医療機関の場所

	回答(人)	割合
1 市内	1,249	66.6%
2 市外	411	21.9%
3 県外	216	11.5%
合計	1,876	100.0%



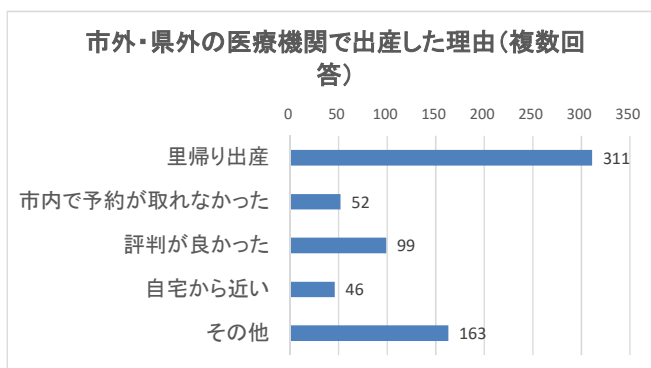
■ 出産した市内の医療機関

	回答(人)	割合
1 つくば市パースセンター	59	4.7%
2 筑波大学附属病院(産科)	254	20.3%
3 筑波学園病院	166	13.3%
4 なないろレディースクリニック	674	54.0%
5 なないろもあパースクリニック	96	7.7%
合計	1,249	100.0%



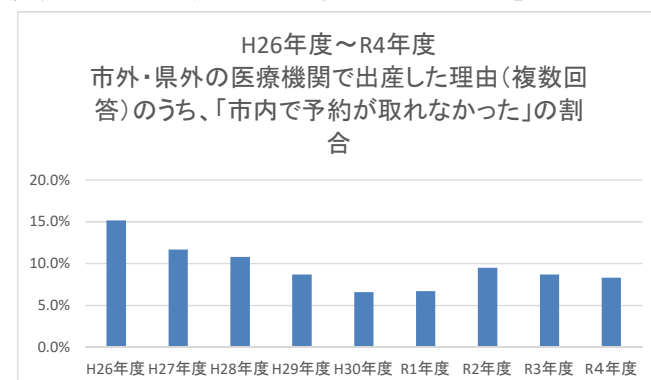
■ 市外・県外の医療機関で出産した理由(複数回答)

	回答(人)	割合
1 里帰り出産	311	49.6%
2 市内で予約が取れなかった	52	8.3%
3 評判が良かった	99	15.8%
4 自宅から近い	46	7.3%
5 その他	163	26.0%
合計	627	100.0%



■ 平成26年度～R4年度 市外・県外の医療機関で出産した理由(複数回答)のうち、「市内で予約が取れなかった」の割合

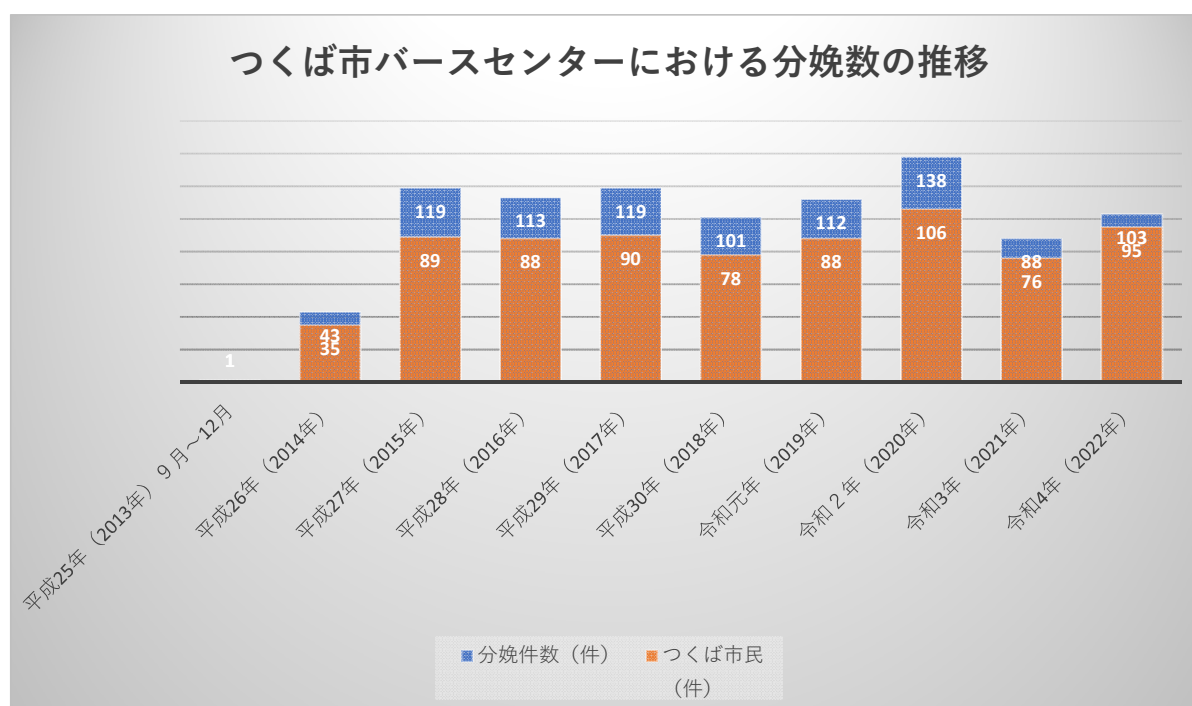
年度	割合
H26年度	15.2%
H27年度	11.7%
H28年度	10.8%
H29年度	8.7%
H30年度	6.6%
R1年度	6.7%
R2年度	9.5%
R3年度	8.7%
R4年度	8.3%



1 つくば市バースセンターにおける分娩数の推移

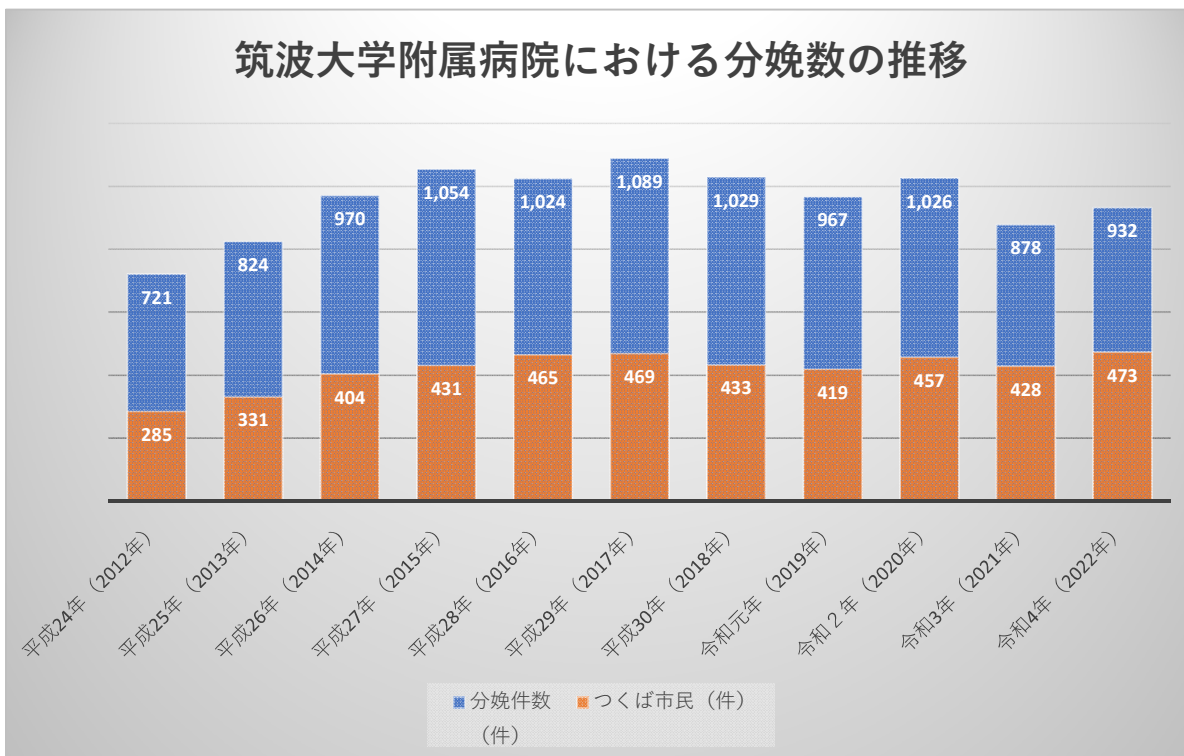
*年集計（1月～12月）

年	分娩件数 (件)	つくば市民 (件)	つくば市民 割合 (%)	分娩 累計件数 (件)	つくば市民 累計件数 (件)	つくば市民 累計割合 (%)
平成25年（2013年）9月～12月	1	1	100.0	1	1	100.0
平成26年（2014年）	43	35	81.4	44	36	81.8
平成27年（2015年）	119	89	74.8	163	125	76.7
平成28年（2016年）	113	88	77.9	276	213	77.2
平成29年（2017年）	119	90	75.6	395	303	76.7
平成30年（2018年）	101	78	77.2	496	381	76.8
令和元年（2019年）	112	88	78.6	608	469	77.1
令和2年（2020年）	138	106	76.8	746	575	77.1
令和3年（2021年）	88	76	86.4	834	651	78.1
令和4年（2022年）	103	95	92.2	937	746	79.6
累計数	937	746	79.6	937	746	79.6



2 筑波大学附属病院における分娩数の推移 *年集計（1月～12月）

	分娩件数 (件)	つくば市民 (件)	つくば市民 割合 (%)
平成24年 (2012年)	721	285	39.5
平成25年 (2013年)	824	331	40.2
平成26年 (2014年)	970	404	41.6
平成27年 (2015年)	1,054	431	40.9
平成28年 (2016年)	1,024	465	45.4
平成29年 (2017年)	1,089	469	43.1
平成30年 (2018年)	1,029	433	42.1
令和元年 (2019年)	967	419	43.3
令和2年 (2020年)	1,026	457	44.5
令和3年 (2021年)	878	428	48.7
令和4年 (2022年)	932	473	50.8
累計数	10,514	4,595	43.7



3 産婦人科を専攻する医師及び助産師数

* 年度集計

	医師数 (人)	医師の勤務地内訳 (人)			
		筑波大	市内	県内	県外
平成25年 (2013年)	5	1	2	2	0
平成26年 (2014年)	4	1	1	2	0
平成27年 (2015年)	6	2	2	2	0
平成28年 (2016年)	5	2	1	2	0
平成29年 (2017年)	4	2	0	2	0
平成30年 (2018年)	9	1	1	6	1
令和元年 (2019年)	8	3	1	4	0
令和2年 (2020年)	14	2024年3月後期研修修了予定			
令和3年 (2021年)	6	2025年3月後期研修修了予定			
令和4年 (2022年)	5	2026年3月後期研修修了予定			

< 予定 >

***年度ごとの後期研修修了時の状況の数を計上する**

	助産師 (人)	助産師の勤務地内訳数 (人)			
		筑波大	市内	県内	県外
平成25年 (2013年)	0	0	0	0	0
平成26年 (2014年)	2	2	0	0	0
平成27年 (2015年)	4	2	1	0	1
平成28年 (2016年)	5	2	2	1	0
平成29年 (2017年)	4	2	0	1	1
平成30年 (2018年)	5	2	1	0	2
令和元年 (2019年)	4	3	1	0	0
令和2年 (2020年)	4	3	0	0	1
令和3年 (2021年)	2	1	1	0	0
令和4年 (2022年)	5	2024年3月大学院助産師養成課程修了予定			

※本学に助産師養成課程は無かった

< 予定 >

***年度ごと (大学院修了時) の状況の数を計上**

4 筑波大学附属病院産婦人科でのハイリスク妊産婦への対応

(1) 精神疾患既往もしくは合併妊婦分娩数 年間110名 (2022年実績)

上記ケース全例について、週1回の産科医師、精神科医師、助産師、ソーシャルワーカーによるミーティングを実施し、情報の共有、医学的管理方針の決定を行っている。

※**うちつくば市民の支援数** 年間39名 (2022年実績)

(2) 経済的に問題のある妊婦 年間約35名分娩 (2022年実績)

早期からソーシャルワーカーが関与している。

※**うちつくば市民の支援数** 年間約10名 (2022年実績)